

令和元年～2年度 新潟県・新潟市小学校教育研究会指定研究（2年次）  
「特別の教科 道徳」授業研究会 活動記録

## 1 基本情報

(1)研究主題： 「考え、議論する道徳授業」への質的転換

～問題意識を大切にし、対話を通して

自己の納得解を見出すための手立ての工夫を通して～

(2)教科： 特別の教科 道徳

(3)日時： 令和2年11月17日（火）

(4)会場： 魚沼市立須原小学校

## 2 研究の概要

本校では、研究1年次の実践に取り組んでいく中で、以下のような課題が生まれてきた。

### ①問題意識を学習課題に繋げる

導入で児童がもった問題意識を本時の課題に繋げる際、一人一人の問題意識が多様であり、「本時の学習課題」を設定する際に、全員が納得しないまま設定してしまったり、時間がかかってしまって話し合う時間が短くなってしまったりする場面が多く見られた。

### ②児童同士が関わり合う対話を展開する

対話を展開する際に、「教師と子どもとの1対1のやりとり」が多くなったり、「子どもの考えを発表する『発表会』」のようになってしまったりする様子が見られた。

また、対話場面での児童の様子として、自分の考えをうまく伝えられなかったり、友達の発言を理解できなかったりする姿が見られた。

これらの課題を踏まえ、本研究の主題を設定し、以下の手立てに取り組んだ。

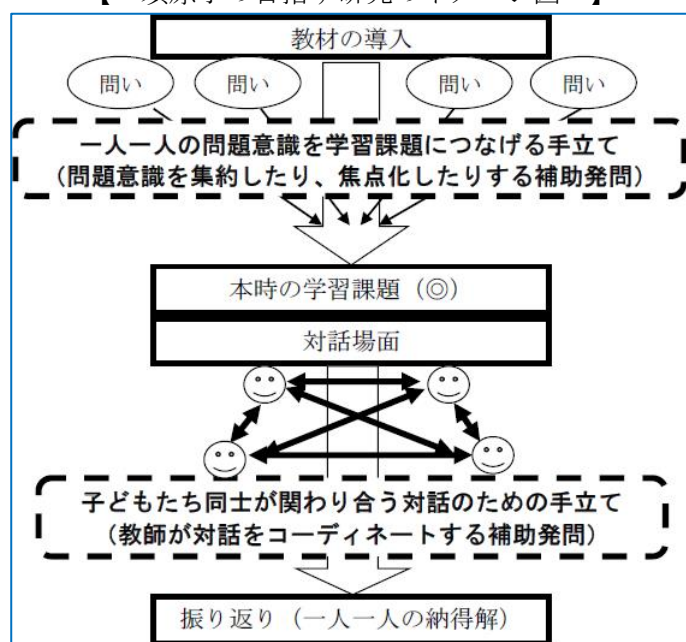
### 【 須原小の目指す研究のイメージ図 】

#### <問題意識から本時の学習課題を設定する手立て>

- ・問題意識を集約したり、焦点化したりする補助発問  
教材と出会った際の児童の反応や思考のズレを基に、問い返したり、感想を提示しながら児童に問いかけたりするなどの方法を実践した。

#### <児童同士が関わり合う対話のための手立て>

- ・教師が対話をコーディネートする補助発問  
児童同士の横の対話ができるようにしたり、話し合いを活性化したり、思考の転機を促したりする補助発問を導入し、実践した。



### 3 授業の概要

#### (1) 2 学年授業

**授業者** 教諭 齋藤 さやか **単元名** 「ぐみの木と小鳥」

**概要** 嵐がやむのを待っている時、小鳥が考えていたことを話し合う活動を通して、困っている人に、温かい心で接すると、相手も自分も嬉しい気持ちになることに気づき、日常場面でも、困っている人がいたら、温かい心で接していこうとする意欲を高める。



#### 【問題意識を引き出したり焦点化したりする教材提示と発問】

紙芝居で教材を提示した。児童は、ストーリーに対してつぶやいたり、登場人物の行動を動きで表現したりしながら教材を理解していった。児童の「小鳥が迷っていること」に対するつぶやきが見られたことから、教師は「小鳥は、どんなことを悩んでいたのかな」という発問をした。すると、児童からの考えが不明瞭な様子や、様々な捉えのつぶやきが出てきたため、「◎嵐の中、小鳥はどんなことを考えていたのかな」を本時の課題として授業を展開した。

#### 【教師が対話をコーディネートする補助発問】

「○○さんが言っていること分かる？」といった教師の問い返しを受けて、他の児童がその発言をより詳しく言い換えることができた。また「ぐみの実は菓なの？」という問い返しには、児童がぐみの実に込められた小鳥やぐみの木の思いを捉えたりすることもできた。

#### (2) 5 学年授業

**授業者** 教諭 金山 一太郎 **単元名** 「銀のしょく台」

**概要** ミリエル司教がジャンを許した理由について話し合うことを通して、相手を許すことや受け入れることの難しさ、尊さに気づき、謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にしようとする心情を育てる。



#### 【問題意識を引き出したり焦点化したりする教材提示と発問】

あらすじ確認後、事前読みの感想で多く見られた「自分だったらジャンを許せない」というものを取り上げながら、「みんななら、ジャンを許す？許さない？」と教師が発問した。多くの児童が「許さない」を選んだが、「みんなは『許さない』を選んだのに、なぜ、司教はジャンを許したのだろう」と教師が発問することで、児童の考えと教材にズレがあることが明確になり、「◎なぜ、司教はジャンを許したのか」という学習課題を設定した。児童が、教材のもっている道徳的価値に迫っていく姿や、対話の内容がそれた時に、本時の課題に立ち返りながら話を進める様子が見られた。

#### 【教師が対話をコーディネートする補助発問】

対話に転機を促す発問として、教師が「お金があればいいってこと？」と問い返すと、児童がそれに対して反応しながら「困った人を助ける」などの、新たな視点が生まれてきた。さらに、「じゃあ、食器をあげれば、ジャンは司教のような人になる？」と問い返すと、「司教は、ジャンにやさしい心を教えてあげているのではないか」という思考の変容も見られた。児童が発言したことに対して、教師が受け止めながら、それをより深めるために違う側面を問い返すことで、児童がさらに一段階深く考えることができていた。

## 4 研究の成果

### (1) 指導者によるご指導

#### ① 2年生授業「ぐみの木と小鳥」について

＜長岡市立千手小学校 校長 捧 信之 様より＞

- ・紙芝居での教材提示と、教材文の読み方の工夫により、児童が教材の世界に入り込んでいた。
- ・児童が、板書と関連付けながら、「小鳥」「リス」「ぐみの木」の三つの視点を行き来しながら考えていた。重層的な学びが生まれていた。
- ・道徳の授業を通して、「思慮深い子ども」を育てていきたい。「思慮深さ」とは、論理的な考えと、感情や情緒が一体となったものである。そのような児童が育つことで、世界が少しずつでもよくなっていくのではないかと考えられる。

#### ② 5年生授業「銀のしょく台」について

＜新潟大学教職大学院 准教授 一柳 智紀 様より＞

- ・児童が発言したことを、教師が受け止めながら、それをより一層深めるために、違う側面をもう一度問い返すことで、児童がさらに一段階深く考えることができる。
- ・本時の手立てにより、最初に出た学習課題が、問題意識として児童の中でしっかりと共有されていた。その証拠として、本時では、児童が考えをつなぎ、深めていく姿が見られた。
- ・道徳の授業をする教室そのものが、「道徳的実践の場」である。児童の中で、互いの発言を聴き合って「どう考えたのだろうか」と相互に理解し、互いに認め合う姿があった。

### (2) 成果と課題

#### ① 成果

##### 【問題意識を引き出したり焦点化したりする教材提示と発問】

- ・児童のつぶやきや動きを取り上げながら、問題意識がある場面に視点を焦点化し、考えのズレを捉えさせることが、児童の問題意識から学習課題を設定することに有効である。
- ・問題場面の判断の難しさを明確にしながら、感想にある児童の問題意識を踏まえて、判断の理由に迫り、「全員がはっきり分からない」「もやもやしている」ことを確認することが、問題意識から学習課題を設定することに有効である。

##### 【教師が対話をコーディネートする補助発問】

- ・あいまいな発言を取り上げ、他の児童に問い返す。さらに、他の児童の発言が合っているか発言者に返すことで、児童の同士の横の対話を広げることに有効である。
- ・偏った思考の反対の立場を取り上げ、児童の発言を踏まえながら、さらに批判的に問い返すことは、思考を一旦立ち止まらせ、改めて考える機会をつくることに有効である。

#### ② 課題

- ・児童と教師の考えている問題場面や本時の学習課題にズレが生じている場合、授業展開のつくり方や手立ての取り入れ方をどのようにすると有効かを考えていく。また、児童の考えたいと思う問いが、教材や児童の実態、発問の種類によって、どのような傾向があるのかを分析していく。
- ・学習課題の設定までに時間がかかる。本時の展開部分で範読や紙芝居などで教材を提示する際に、効率的に児童と教師の意識が重なる学習課題を設定するために、どのような手立てが考えられるか、検討していく。